

変化の始まり

第163号（昭和41年4月）から、サイズがタブロイド版からB5版に。その後、第303号（昭和53年1月）では、紙質がざら紙からコート紙に。第392号（昭和60年4月）では題字『あつま』の字体が毛筆体から、デザインされた字体に変わりました。



第232号の表紙は初のカラー印刷。荒々しい厚真川の流れが印象的です。昭和41年からは、正月号の表紙が毎年、カラー印刷されることになりました。

下の写真も同じく第232号。過去を振り返ると、現在も続く厚真の『農業・福祉』などの基盤は、先人が築き上げてくれたもの。当時の広報の紙面でも、様々な取り組みが紹介されています。



行政が今、何を行っているかを住民全体に伝えることが、住民の手による村づくりの第一歩。昭和20年代から30年代に作られた広報では、どこの町や村でも行政からのお知らせなどが多くを占めていました。

開村60周年

厚真村開村60周年を特集した第49号（昭和31年）。この60周年の記念を機に、待望の厚真村史が刊行される運びとなります。



開村60周年記念事業を、この年（昭和31年9月）に行うことを計画。広報を通じて住民に周知されました。



クイズ、登場。



上の写真は、昭和32年8月に発行された第62号。これまでにない企画に、当時驚かされた方も多かったのではないのでしょうか。初登場、『広報クイズ』。現在の広報にもある長寿コーナー。

広報の創刊は民主主義への思いから

昭和27年1月、厚真村最初の広報「村報厚真」が創刊され、全戸に無料で配布されました。当時の村長、池田宗正さんによる創刊の言葉には、「村報厚真は、その使命に徹し、公正をして村民に親しまれ愛されるものになるよう期待する」と記されています。

第20号の内容、写真の建物は、昭和28年当時の、役場庁舎です。



凍れる雪の真下より
希望の命燃やしつつ
伸びゆく若芽を思うとき
若き力の歓びは
われらが胸に溢れるなり
(厚真青年の歌 一番抜粋)



上のマークは、一般応募で昭和29年に改正された村の紋章。村民和協の意を現す。右上は、影山豊さんが作曲した『厚真青年の歌』。



縦2枚に並べられた写真は、村民運動会の様子。左側の記事は、胆振青年陸上競技のことです。

特集

発行スタート

昭和27年1月に発行された創刊号。「公正の念をもって、村民に親しまれ愛される、『村報厚真』であることを期待する」。当時の村長、池田宗正さんによる創刊の言葉の一文です。

第1号の広報はタブロイド判（通常の新聞の半ページ分の大きさの型）、裏表の二面刷りでスタートしました。



記念すべき広報の第1号、トップの記事には『農業振興五カ年計画立案』。その他に、税や教育についての情報、また新たに国民の祝日として『成人の日』が定められたことなども掲載されています。



「講和の暁にかがやく、新春を迎え、そのプレゼントに『村報厚真』を贈ることのできる喜びは無上である」。…編集後記には、当時の時代背景や担当者の苦勞が感じられます。

歩み続けて、



広報『あつま』が現在の形で発刊されたのは今から58年前、昭和27年1月のこと。今回発行する平成22年12月号で、めでたくちょうど700号を迎えました。

700号となる今回、これまで町民の皆さんと行政との架け橋となってきた広報紙のこれまでの歩みを振り返りながら、あらためて広報広聴の役割についてご紹介します。



広報と広聴 その役割とは？

『広報』という用語は、戦後、「パブリック・リレーションズ（PR）」という言葉がアメリカから導入された際に、その訳語として誕生しました。

現在、行政のPR活動として、幅広い意味で使われている広報は『広報』と『広聴』の2つに分けられ、それぞれ次のような役割を担っています。

【広報】
町の施策や事業などの行政情報を分かりやすく提供し、町民の皆さんの理解を得て参加してもらう。

【広聴】
意見・要望など町民の皆さんの声を広く聴き、町づくりに生かしていく。



町制30周年



第457号
(平成2年9月)

平成2年、厚真町はいよいよ町制施行30周年を迎えます。その前々年、第428号(昭和63年4月)から広報のサイズがB5判から現在と同じ、国際規格のA4判に変更。また、記念の年を控え、町制30周年にまつわる企画が、次々と始まりました。

上の写真は、平成2年9月号に掲載された「わがマチ30年」の特集記事。「未来に向かって発進」と本文内容にも力強さを感じます。

平成12年からは、編集者自らレイアウト等を含め、パソコンで編集作業を行うDTPを導入。紙面内容を考案し、全体のデザイン、レイアウトなどのリニューアルも広報担当が行うようになり、現在に至っています。

気持ちとは裏腹に、思うようにいかないことも多々…。機嫌が悪くてあつという間に終わる時もあれば、機嫌が悪くて、どんなに一生懸命あやしても、時間や日を変えて伺っても泣いて撮影できないという時もありました。思うような写真が撮れなくて泣きたくなることもありましたが、今では懐かしい思い出です。皆さんの力をおかりしながらの7年間でしたが、今では、私の大きな『心の財産』です。

広報紙「あつま」の移り変わり

名称	発行年月日	規格等
厚真村報	昭22年4月	B4判、ガリ版刷り、各班回覧。
村報厚真	昭29年1月	タブロイド判、創刊号、2ページ建て、全戸配布になる。
町報あつま	昭35年1月	町制施行に伴い、名称を「町報あつま」に変更、4ページ建てのものが出始める。
	昭38年5月	A4判、4～10ページ建て。
広報あつま	昭41年4月	B5判、名称を「広報あつま」に変更。
	昭47年1月	この年から新年号だけ、カラー表紙。
	昭54年9月	この月から昭55年1月号まで全ページ2色刷り。
	昭55年4月	20～30ページ建て。
	昭57年4月	表紙がカラーになる。
あつま	昭63年4月	A4判にサイズを拡大。
	平元年4月	名称を「あつま」に変更。
	平元年5月	本文の一部が2色刷り。



心掛けていくこと、読む皆さんの心をつかむ広報を。何よりもまず、町民の皆さんの手にとってもらえる1冊を作るため、私たちの努力はこれからも続きます。

広報紙は、読むつもりのあるなしにかかわらず、毎月各戸に配布されます。読まれることなくゴミ箱行きになってしまいう広報では、情報が本場に届いたことにはなりませんし、それではちよつと悲しいですね。



第440号
(平成元年4月)

記念すべき第一号は、軽舞の森田一彦さんでした！

Interview



元広報担当
佐々木春香さん
(現教育委員会)

私は平成8年から平成15年までの7年間、広報を担当しました。初の女性の広報担当として「女性らしい視点で、今までとは違った広報づくりを期待している」と言われての異動で、プレッシャーを感じたのを覚えています。担当当初は、ワープロと『割付用紙』という専用紙を使って広報紙を作成。ほとんどが手作業で、その場では出来上がりが見えないため、慣れるまで編集作業が深夜に及ぶことも度々ありましたが、その時教わったことは、数年後にパソコン編集に変わってからも、そして今でも役に立っています。最も思い出深いのは、当時表紙を飾っていた子ども達の写真撮影です。毎回「笑顔の写真を撮ろう！」と意気込みだけは十分なのですが

厚真町は今、行政と住民の皆さんとの『協働』(共に考え、共に行動すること)による自主・自立のまちづくりの実現に向け、歩み始めています。

広報は、この『協働』のまちづくりを進める上で、情報を共有するための土台となるもの。行政と住民をつなぐ『心のパイプ』としての役割が、今後ますます重要になってくると言えるでしょう。

広報紙は、読むつもりのあるなしにかかわらず、毎月各戸に配布されます。読まれることなくゴミ箱行きになってしまいう広報では、情報が本場に届いたことにはなりませんし、それではちよつと悲しいですね。

心掛けていくこと、読む皆さんの心をつかむ広報を。何よりもまず、町民の皆さんの手にとってもらえる1冊を作るため、私たちの努力はこれからも続きます。



記者
河村俊之さん
(苫小牧民報社)

Interview

最初、あまりのボリュームに驚きましたねと10月1日から厚真に住み始めた河村記者。「内容として読みごたえがあると思います。地域の話題、人、声、文化など、そういった町民の関心をひくような情報が盛り込まれている。さらなる期待を込め、提案させてもらうなら、厚真の子どもたちは明るく活発な子が多いので、広報紙の中でも子どもたちが自由に投稿できるコーナーがあっても面白いかもしれませんね。そうすると、子どもたちも広報紙をしっかりと読むようになるはず。今後も地域の声を数多く取り込んでほしいです。」

人気コーナースタート!

現在も続いている人気コーナー“人物紹介”。旬の人にスポットを当ててお話を聞く、ロングインタビューのコーナーも始まりました。440号(平成元年4月)の発行から、呼び名を『青春グラフィティ』としてスタート。700号を数える現在は『出会いいきいきふるさと図鑑』として掲載が続いています。

広報では、住民の皆さんの声を反映し、町民皆さんと行政をつなぐ「心のパイプ」となるような広報活動を続けています。町民の皆さんが主体となっている町づくりに、広報活動は欠かせません。あらゆる情報を伝え、それを基本に皆さんが考え

これからの広報が目指すもの

「これからの」広報では、住民の皆さんの声を反映し、町民皆さんと行政をつなぐ「心のパイプ」となるような広報活動を続けています。町民の皆さんが主体となっている町づくりに、広報活動は欠かせません。あらゆる情報を伝え、それを基本に皆さんが考え

変わらぬ目標

広報で、いつの時代も変わらず呼びかけているテーマ…。その代表的なものの一つが、交通安全です。昭和63年には、交通安全意識の共有化を目的に『セーフティ厚真』と題したコーナーが登場。道内において、免許を取得したばかりの若者からベテランドライバーまでの、悲惨な交通事故の現場が7年に渡り掲載されています。事故の恐ろしさを紙面で感じてもらい、町民に交通安全を促しました。



第450号
(平成2年2月)

平成22年6月、厚真町は交通事故死ゼロ1500日を達成し、次なる目標である2000日に向けて今もなお挑戦が続いています。事故死だけではなく、交通事故そのものが起こらない町に…。変わることのないこの目標をテーマに、広報での呼びかけも決して終わることがありません。



第694号
(平成22年6月)

Interview



杉井紀子さん
(ルーラル)

厚真のルーラルビレッジに移り住み、23年目の杉井さん。「当時、移住してすぐに情報を得る上で、広報紙が一番役に立ちましたね。細やかに、ここの広報紙は町の情報が載っていると思います。来た頃から続いているコーナーが『人物紹介』。毎回、あれが一番楽しみで見えていますね。私も地域で新聞を作っているんですが、スペース内に字数をおさめるのが大変。でも、小学生の時から壁新聞を作るのが好きでした。その延長線上で、今も楽しく作っていますよ。これからも『広報あつま』期待してます！創刊700号本当におめでとうございます。」

「ルー」新聞

発行者 地域通貨『ルーの会』事
010年(平成22年)11月10日(水)

この数年の世界的な金融不安を契機として、地域通貨が再び注目を集めており、1970年代頃から80年代にかけて先駆的な取り組みが行われてきた。2000年代初期にかけ、本格的に地域通貨が普及し始めました。その厚真町は多様な生活スタイルが共存する地域であり、地域通貨の活用が、地域住民の生活をより良い方向に改善するの現状と今後の展望について、見ていきたいと思います。

◆「エコマネー」型地域通貨
「エコマネー」型地域通貨は、厚真町で発行された地域通貨です。発行は、厚真町で発行された地域通貨です。発行は、厚真町で発行された地域通貨です。

平成13年創刊。ルーラル自治会における地域通貨「ルーの会」の周知を目的に作られた。現在25号目を発行。

親しみやすい紙面づくりに向かって

紙面のスタイルが現代のものに近づいてきたのは、昭和54年ころから。『健康情報』、『町の話題』、『人物紹介』などのコーナーが設けられたほか、「親しみやすい紙面づくり」を目指し、生活に役立つ情報や町民の皆さんの声を盛り込んだ記事が次々と登場します。

その後、昭和59年に始まった『ルーラルビレッジ』の分譲により、新しく厚真に移り住む人々が飛躍的に増加。古くから住む町民の方と新しい町民の方、同じ厚真町民としてコミュニケーションのきっかけとなることを願い、この頃の広報では、さらに多くの町民の方に登場していただきました。